

英文學評論

III

10 - 14

英文學評論

第 X 集

説得とドラマ……………嶋 原 真 一

——『ハムレット』第四幕第七場より——

ミルトンの失明をめぐる問題……………宮 西 光 雄

『ジョナサン・ワイルド』の周辺 (2)……………飯 沼 馨

アーノルドの古典主義 (1)……………川 田 周 雄

オックスフォード拝見……………佐 々 部 英 男

京都大学教養部英語教室

編集後記

☆いつの程にか、めっきりと日が短くなった。A号館第四研究室を訪れる人は、昨年までの火鉢が姿を消して、新品の石油ストーブが、可憐な青い焰を燃やしているのに気がつくであらう。研究室といえば、新たにE号館が完成して、我々の教室でも一部がそちらに新居を構えることになった。おいおいに研究室が増えてゆくことは、我々にとっての喜びである。

☆例によって教室の消息を少々。今春我々の仲間に、新進の渡辺久義氏を迎えた。デニス・キーン氏は、六月、任期充ちて帰国、七月、大浦氏が教授に、岡田氏が助教授に、十一月には山内氏が教授にそれぞれ昇進された。

昨年来、四人の教室員が、海外に出張及び留学をされていたが、いずれも前後して無事帰任された。教室では、それを機として、二回にわたり、恒例の教室研究会をそれにあてて、諸氏の帰朝報告をうかがった。中野、大浦、安藤、尾崎の四氏である。いづれ何らかの形で、それぞれの御研究の成果を、本誌に頂きたいと思っているが、取敢えず本号では、大浦氏の一文を頂戴することが出来た。

☆昨年、第一回目を出した「英文学評論双書」は、今年度その第二陣として、山内氏の「オニール研究」が近々出版される。なお、寺田氏のT・S・エリオット研究も、程なく研究社から出版されると聞いている。

☆秋も深まりゆく折柄、ひきつづいて本年度の第二集を編集集中である。教室員各位、委員が困る程沢山、原稿をお寄せ下さい。(編集委員)

英文学評論 第十四集

非売品

昭和三十八年十一月一日 印刷
昭和三十八年十一月五日 発行

編集者

京都大学教養部英語教室

代表者 宮西光雄

印刷所

内外印刷株式会社

京都市下京区西洞院七条下ル

発行所

京都大学教養部英語教室

京都市左京区吉田二本松町

目次

説得とドラマ	鳴原真一……………(一)
——『ハムレット』第四幕第七場より——	
ミルトンの失明をめぐる問題	宮西光雄……………(一九)
『ジョナサン・ワイルド』の周辺	飯沼馨……………(二三)
アーノルドの古典主義	川田周雄……………(二五)
オックスフォード拝見	佐々部英男……………(二五)

説得とドラマ

——『ハムレット』第四幕第七場より——

鳴 原 真

『ハムレット』は魅力のある芝居だが、謎の多い芝居でもある。おそらく、その謎のために魅力のある芝居となり、「芸術的には失敗作」であるために飽きのこない芝居になっているのかも知れない。そして、現代の書斎人からみれば欠陥としか思えないところも、劇場の人間であったシェイクスピアには、必要にして欠くべからざる職業的な技の見せどころと考えられていたところもあったのではなからうか。たとえば、第四幕第七場、クロード・ディアスとレアーティーズがハムレット謀殺計画を練るところである。

この場はホレイシヨがハムレット帰国の手紙を受取る場を間において、話の内容から時間推移からも、レアーティーズが謀叛をおこして宮廷へ乗込んできた第五場が続いている。アクシヨンは王がポロウニアスの死には関係のないことを立証したところへハムレット帰国の報が届き、復讐の機会ができたことを喜ぶレアーティーズに王がその手段を考えだしてやる、とそこへ王妃がオフィーリア溺死の顛末を語りによってくる、という三つの部分からできている。台詞の調子はアイロニカル、レトリカル、ポエティカルと順を追って変っていく。

王がレアーティーズを手中におさめていく部分は、すぐ前の第六場でハムレットが帰ってきたことを観客が承知しているのだから、ハムレットは死ぬのだという信念のもとに展開される王の口説は、その確固たる主旨とは

裏腹なアイロニーを倍音に響かせている。ハムレットの手紙でこの調子が破られると、主題はクロードィアスのハムレットに対するカウンター・アクションに転じて、ハムレット殺害の第二の計画が慎重・綿密に練りあげられていく。この覬どころ、というより、聴きどころは、クロードィアスのレアーティーズ説得で、レトリックの面白さが興味の中心を構成している。駈引きの巧みな策略家・扇動屋の化身である王と、復讐・復讐で精神的な盲者になり果てたレアーティーズ、王の笛に踊るレアーティーズの単純・直截な性格が、ハムレットと対比して刻みあげられていく。そして、オフィーリアの死を語る王妃のエレジーでこの場は結ばれていくのである。

さて、問題はこの場の中核をなしている場面、ハムレットの手紙で王が奸計の失敗を知ったところから王妃登場まで、クロードィアスがレアーティーズを説得していく場面である。「丸裸で上陸、明日、拝顔の栄をたまわりたく……その節、突然にしてなおかつ不思議」な帰国の理由を告げようという文面に驚く王と、「帰って来るがいい、この心の痛手もやわらぐぞ、眼の黒いうちに面と向って云ってやる、『思い知ったか』と興奮するレアーティーズ——まずそのあたりからJ・D・ウィルスン校訂の新シェイクスピア版『ハムレット』をもとに、テキストの順を追ひ、訳文によってできるだけ詳しくこの場の内容を検討してみよう。

予期に反するハムレットの帰国に、クロードィアスは驚いているだけではすまない。ハムレットは危険人物なのである。彼は王の秘密をかぎつけたばかりではなく、劇中劇の人殺しは王の甥だと脅迫めいた公言をしたすぐその後で、本当に人を一人殺している。しかも、殺されたのはこの国の宰相ポロウニアスなのである。クロードィアスの罪を公に晒す危険などは取るに足りない。そのくらいのことならクロードィアスには事態の收拾は可能かも知れないからだ。しかし、絶えず身边に居られたのでは、いつ直接の危害がわが身に及ぶか知れたものではない。だからこそ、王はポロウニアス殺害の機をうまく利用してハムレットを遠ざけると同時に謀殺の手を打っ

た。それが失敗したとなるともう一度同じ手を使うのは危険だろう。今度はハムレットもその手に乗らぬ公算が大きいし、手の内を見すかされるおそれがある。別の手を使うに限るのだが、と王の頭の中ではハムレット帰国に対処して取るべき対策が敏速に組上げられていくのである。ハムレットの存在は王にとってはわが身の破滅であり、レアーティーズにとっては父のかたき、理由は異なるにせよハムレットが二人の共通の敵であることには違いない。ポロウニアス殺害を理由にハムレットを公に糾断することは、王妃の愛と民衆の人望を考えると、とうてい不可能であることは王自身がレアーティーズに説いた通りだが、その蔭にある王の「私」の理由は誰にも明かすことはできない。しかし、レアーティーズの立場は違ふ。彼はいつ、どこで、いかなる形でハムレットと対そうとも、復讐という明白な理由がある。これはクロードィアスにとっておあつらえ向きの「状況」だ。自分が手出しをしなくてもレアーティーズがハムレットの片をつけてくれるだろう。王は手を汚さずに目的を果せるのだから、この点には問題はない。だが、おおっぴらにやられては困る。誰の眼にも反逆的殺人行為と映ったのではレアーティーズは本望でも、まずいことには違いない。完全犯罪か、さもなければ過失にみせかけて、王のあずかり知らぬことにしておくことが必要なのである。それには相当悪辣なトリックが必要だろう。王はレアーティーズの『思い知ったか』という叫びをキューにして「もしそうなら」と後を続け、「どうしてそんなことが、だがどうしてそうでないと……」と最後の心の動揺に決断を暗示すると、「云う通りにしてくれるか」と切り出す。

この時、王の頭の中にはハムレット殺害の第二案が概略できあがっているはずである。レアーティーズは承諾するが「気が休まるから云う通りにしてみろというのでなければ」と条件をつけている。王はたった今迄レアーティーズの気を鎮めようと知恵をしぼってきたのだから、レアーティーズの反応は自然なものである。その句を

受けて王は「お前の心が休まるからだ」と繰返しの緒を使う。そして、ハムレットが帰ってきて、もう一度出かける気がなければ「うまく働きかけて、一つ策略にひっかけてやろう。この考えは今が丁度ころあいだ」と云い、しかも、その策略をめぐらせばハムレットは必ず倒れ、世の疑惑はおろか「母親だって勘づくまい、事故だと云うにきまっている」と説くのである。王がここで第一に強調しているのは、彼の云う策略の二重の安全性である。まずその一は、ハムレットが必ずそれにひっかかって死ぬことになるというもつとも肝心なことで、これは王にとっても、レアーティーズにとっても等しく重要な関心事に違いない。その二は、その死に対する疑惑がみじんもおこらないということで、これはレアーティーズには充分な条件にすぎないが、王にとってはぜひとも必要な条件だ。

王の提案内容がどんなものであるかまだ明らかではないが、ハムレットを亡きものにするための謀りごとであることには相異なく、レアーティーズはすぐ「おおせの通りにいたしましょう」と今度は確言し、さらに「手足になれるよう考えていただけるならなお結構です」とさえ付け加える。勿論、それは王の予期した答だろう。王はそれも計算して計画しているので、そうこなければならぬ。しかし、今度の謀りごとには一つ大きな危険がある。というのは、以前の謀りごと——つまり、兄であった先王ハムレットを毒殺した時はクロードィアスの単独犯だったし、又、イギリス派遣によるハムレット王子謀殺計画も第三者のあずかり知らぬことだった。しかし、今度はレアーティーズを手先に共犯行為を行うのである。まずレアーティーズなる人間を試しておかねばならない。もつとも、レアーティーズが自分の云いつけ通りに動く男だということは王にも明瞭に感じられるだろう。レアーティーズは自分からそう云っているし、復讐は彼の願うところなのだから、王がとやかく説くまでもなく、レアーティーズは王の手足になるだろう。しかし、そこにはレアーティーズの一本気な性格の脆さも隠さ

れているのではあるまいか。やはり王はここでレアーティーズを焚きつけて彼の信念に焼きを入れておかねばならないし、又、彼の心がどの程度迄本当であるのか確めておこうとしても無理はあるまい。なにしろ彼はたった今迄王を敵と考え「レアーティーズを王にしよう、レアーティーズを王に」と叫ぶ暴徒をひきいて宮廷に乗込んできたのだから、いかに取り鎮めたとはいえ、おおせの通りにいたしましうと云われても、そのまま鵜呑みにするのは危険かも知れない。それにことは謀殺である。やはり慎重にことを運ぶのがものの順序というものだろう。以下、クロードィアスがレアーティーズを操るうまさは無類である。

クロードィアスはまず若輩レアーティーズの虚栄心にこびていく。「おまえが旅に出てからよく評判になり、むろんハムレットも聞いている、それ、お得意だという噂の芸だ云々」だが、王はここで「芸」といい、「お得意の」とほめかしてはいるが、さて、人の口にのぼり、おまけにハムレットの羨望の的に迄なっているというものが一体何であるのか、いっこう明言していない。しかし、このくすぐりは当って、「その芸と申すのは？」とレアーティーズは好奇心を寄せてくる。ところが、王は「云ってみれば若者の帽子の飾り、だが、なしではすまされぬな」と若さを強調しておいて、唐突にノルマンディーの男の話を始めるのだ。ノルマンディーは当時その馬と馬術の優れたことで有名だったということだが、王はここで武人の理想像を描きだすのである。「ノルマンディーの紳士」によって象徴される武芸の映像は、完全な統一を持った世界で、どう定義してみてもその実体は写しきれず、テクニクを越えた魔術のようなものに昇華させられているが、ウィルスン・ナイトはこの一節をとりあげて「ハムレットの役者連中への言葉と武芸の上でアナログになっている、二つは共に技とか芸とかのスタイル同様、生命力が潜んでいることを暗示している」と説いている。彼はさらに進んで「いま、王とレアーティーズはハムレットが切りはなされてしまった既成の価値の世界を楽しんでいる……これは思索の牢屋の向

このもっと広い世界で、内省的な、理想家の苦悶ゆえにハムレットは入ることができないのだ。二人は一時、時と場合を忘れ、王は不必要なまでに自分の描写を敷衍していき、二人は自分達の世界がお互の中に写り合っているのを認めて喜んでゐる」と述べている。ウィルスン・ナイトの言葉は、この場の続き具合からみると少し浮わつてゐるようだが、ここには牢屋であるデンマークとは違つた世界、病氣とは無縁の健康な世界が描かれてゐることはわかる。目下の話題とは正反対の明るい世界——別世界、理想の世界なのだ。

レアーティーズは王が誰のことを語つてゐるのかすぐ見当がついた。ラモードのことである。この固有名詞の綴りについても正体についても諸説あつて判然としないが、恐らく当時の舞台ではトピカル・アリユージョンの当て込みでもあつたらしい。しかし、今問題なのはこのラモードという人物がレアーティーズに云わせると「国の華、国の宝」であるということだ。フォーティンブラスがハムレットの理想像であるように、ラモードなる武芸の達人はレアーティーズの偶像として提示されてゐるのである。しかも、王のこの話には畏が仕組まれている。次の王の台詞は、この武芸の化身、若人の憧れの人がレアーティーズを誉めたというのである。自分で下手に相手を誉め、空世辞めいた響きを与えるかわりに、まず、理想像とか、オーソリティーを持つてきて、この人物が誉めていたというあたり、なかなか手の込んだ芸当で、さすが策略家だけのことはある。一本気な若いレアーティーズだ。こう虚栄心をくすぐられたのではのぼせぬわけはあるまい。そこへ王はさらに追い討ちをかける。この話を聞いてハムレットが妬み心をおこしたと云うのである。真偽のほどは二の次にして、クロードィアスの心理的レトリックの巧みさは否定できない。こういううまさを説明する効果的な方法は比喩だろうが、「レアーティーズは王の言葉を鵜呑みにしていく。餌も針も重りも」(J・Q・アダムズ)とか、「称讃という巧妙な強化薬に虚栄の強壮剤……妬みの話は仕上げの一滴、薬のなかでもこれが一とう甘い」(グランヴィル・パーカー)と

か、評釈者も腕を競っている。

さて、ここで問題の「芸」というのは「剣の道」で、特に「細身」のことであったことがわかり、ハムレットが一勝負やってみたいといっているところと、ことの輪郭がうっすらと出てきた。そこで王は「さて、そこでだ——」と次を語りかけようとして、言葉をとぎらせる。レアーティーズの顔色を探るのだろう。レアーティーズは王の最上級の世辞に自己充足感を楽しんではいても、王のヒントから自分で結論を引き出すほど人の心は読めない様子。たまりかねて「そこで、どうなのですか」と次を催促する。王の心は複雑だろう。なにしろ共犯者に奸計の策を授けるのだ。おまけに、レアーティーズは一応フランス仕込みの教養を身につけた青年紳士である。すぐさま王の奸計に荷担するかどうかにはやはり一抹の不安が残る。王はまた話題を変えてしまう。「お前にとって、父親は大事なものだっただか」という質問にレアーティーズが当惑するのは当然である。自明の理ではないか。王はそんなことを問題にしているのではないとお説教を始める。

王の論点は二つに要約できる。愛情というものの性格と決心というものの性格だ。まず、愛情論だが、レアーティーズの父への愛を大前提として、クロードディアスは巧みな三段論法を使っている。もっとも、それはこの場の「状況」の中に組込まれているので、単純な表に現れた三段論法のように杓子定規で割切はしないが、三段論法のヴァリエーションである。「愛情には潮時がある」というのが小前提の一で、この裏づけは王の人生体験が「愛情の火花も時に支配される」ということを教えている。小前提の二は、第一の前提をさらに規定するもので「愛の焰の中には、一種の芯のようなものがあって、火勢を衰えさせもする」という性格付けである。以下の二行はその裏づけで、ものには自壊作用があることを云っているのだ。しかし、ここから直接の結論が出てくるのではない。むしろ、この結論を飛躍することによって、次元の異なった結論に転じ、それがそのまま次の前提の

起点になっている。それが第二の論点で「しようと思ったことはしようと思った時におくべきだ」であるが、これは第一の論点とアナロジカルに証明されるのだ。つまり、小前提の一は「この『思った』ことは変る」であり、その二は『思った』ところで「うるさい口あり、おせっかいな手あり、突発事故ありで、その気は薄れ、一日延ばしになる」だが、この口あり手あり事故あり云々は第一の論述の「時」とアナロジカルで、自壊作用は「変る」という動詞一つに要約されている。こうして逆説的な結論が引き出される。「この『しておくべきだ』というのは血を涸らすため息、気は休まろうが体に毒だ」がそれである。

これでこの一節の論理の組立てはほぼ輪郭だけ掴めたことになるが、インブリケーションは曖昧である。クロード・ディアスの説く愛情論といい、任務遂行の道德観といい、当面の話とは無関係で、文字通り取っただけではクロード・ディアスの性格形成という機能を考慮しても、論旨不鮮明だという印象は捨てきれない。当のクロード・ディアス自身でさえ自分の論述を締めくくって「それより、潰瘍の元をつこう」と長ったらしい迂回を認めているのだから、ますますもって蛇足以外のなものでもなさそうである。

しかし、この一節が難解なのは単にインブリケーションが読みとれないからではない。たとえ曖昧でもそれらしきものは幾つか探れるのだ。定説らしきものすらある。この台詞の外面は「愛情」を中心テーマにして「時」と「決心」についての「モラル」だが、同一テーマはすでに劇中劇の場でプレイヤー・キングが遙かに詳しく敷衍して語っている。この事実の重要性に着眼しているのはA・C・ブラッドリーの短いが問題を含んだ言及から、キトリッジ、グランヴィル・バーカー、J・D・ウィルソンと今世紀前半の世界的シェイクスピア研究者を包含し、F・ファーマーガスンにも続いている。しかし、この一組の台詞に共通のモラルがもられていることを指摘することでは共通していても、その読みとり方には相当幅広いニュアンスの相違があるのだ。キトリッジの読みはこ

うである。「クローディアスは『鼠取り』を心からぬぐいさることができないが、無理もない。」グランヴィルリバーカーになるともう少し突込んで「シェイクスピアはガートルードの愛が薄れていくのをクローディアスが次第に気付いてきたことを暗にほめかすのに使っている」と解くのだが、それは「ほんのほめかし程度で余り効果はない」とおよび腰である。それに較べるとJ・D・ウィルソンはクローディアスの第二の論点に「この劇のモラルが総てある」と明解な評言で、王の台詞がハムレットの言動・性格の批評になっていることを指摘し、さらに「クローディアスがそのことを意識しているわけではなく、シェイクスピアがそういう意図のもとに書いた」ので、それはこの台詞ばかりでなく、第四幕のアクシオン全体についてもいえることであり、又、このようなプロクラスティネイション（遷延）がすぐ後で「潰瘍」に譬えられるのは意義が深いと結んでいる。

この劇を特色づけている要素のうちでも、誰もが問題にするプロクラスティネイションという現象は、劇中人物ハムレットのプロクラスティネイションの原因探究に始まって、作者シェイクスピアのプロクラスティネイションという話に迄発展しているのだが、後者の意味では確かにその一端がここにも露呈していると云えよう。ところで、このプロクラスティネイションという言葉はシラブルの数からいってもディレイ（遅延）どころのさわぎではないが、ホワイに対して簡単にビョーズと答えられないこともあってか、文学上の謎を離れ、暗に作劇上の欠陥であるというネガティヴな価値判断をコノティションとするところまで墮してきたのである。この傾向はすでにブラッドリーにあり、彼はプレイヤー・キングとクローディアスの台詞を称して「この劇的ではないが重要なスピーチ」云々という表現を使っている。だが、この台詞は劇的ではないだろうか。プロットは勿論のこと、アクションにも無関係なただのモラルなのだろうか。本当にそうだろうか。ブラッドリーの方がドラマから派生したドラマティックという抽象概念を物指にして、逆に本家本元の有機体であるドラマを計るという誤謬を犯し

ているのではあるまいか。ドラマとは「行動の模倣である」というアリストテレスの基本定義に誤りがないとしても、ドラマと人生そのものを同一視する論理の飛躍ないし初歩的な誤りを犯しているのではあるまいか。

こうした疑問に明快な答を与えているように思えるのは、どうやら、グランヴィル・パーカー一人のようである。彼は王のこの台詞の回りくどさを認めた上で、それは「レアーティーズを益々じらせ、一拳に的を射させようとするためだ」と、この台詞をドラマの構成要素としての確に捕えている。諸家の読みとるインプリケーションは形而上的教義問答の変形の域を出るものではなく、特にクロード・ディアスの性格を裏書きするものでもない。強いてそういう役割があるということにしても、ハムレットの独白から彼の性格についてのデータを収集できるというのと同じ意味あい以上のもではなく、ハムレットに対応する機敏で実行力のある政治家クロード・ディアスの人生観を読みとる自由が残る程度であらう。

さて、クロード・ディアスはこれでまず必要な布石を終えたと考えたのだろう、「それより、潰瘍の元をつこう」と、やっと本題にもどることになる。しかし、彼は自分の策を授けることにしたのではない。レアーティーズの感情を煽りに煽っておいて、やおら、最後の仕上げにかかるのだ。「ハムレットが帰ってくる。で、お前はどうかする、口さきよりも行動で人の子たることを見せねばなるまい。」誘い水である。レアーティーズはそれに乗って「やってやる、教会の中だってかまうものか」と即答する。衝動による論理の飛躍である。王はその決意を誉め称えて論理的な説明を本人にかわって与えてやる。「場所がらだといって人殺しを庇うことはない。復讐にけじめはない。」感情の論理は王の裏書きを得るのである。

シェイクスピアはハムレットをイギリスに送ってから、当然の必要からでもあらうが、対位法的な手法に多くのスペースを与えている。レアーティーズは初めて登場した時からハムレットとは対照的に点綴されているが、

「復讐」という倫理的な問題の解決を迫られた今、完全にハラレルな位置に立たされることになるのである。従って、レアーティーズの言動は総てハムレットと対比され、ハムレット批判の具体的な足がかりとなっている。レアーティーズの「殺ってやる、教会の中だってかまうものか」という態度を、ただ一人無防備のままひざまずいている王の後姿を見て剣を抜きながら、お祈りの最中だからという理由で、絶好のチャンスをついにしてしまふ時のハムレットの言分けと較べてみよう。ハムレットの理由づけは「これが復讐になるか、グッサリとやってみたところで奴は心の汚れを浄め、死出の旅路に立つ支度ができているんだ、なりはせんぞ」というのである。この理屈は一応筋が通ってはいるが、「殺ってやる、教会の中だってかまうものか」というのが本当のパセティックというものではないだろうか。アクションをパッションにすりかえてしまうハムレットと、パッションをアクションに転じようとするレアーティーズの態度の相違は、この効果を狙ったものだろう。そうだとするとクロード・ディアスとレアーティーズの対話の構造が明瞭になってくる。三段論法を利用して紆余曲折を経た王の曖昧な論述は「ポロウニアスを殺したのはハムレットである。そして、ポロウニアスはお前の父親で、お前は彼を愛していた。しからば、お前はハムレットを殺して復讐せねばならない」という単純な論理をロゴスではなくパトスとして述べたものである。「復讐にけじめがあるものか」という言葉は、彼の論法がパトスを狙ったものであることを証拠立てている。したがって、王の論理にロゴスを読もうとする数多くの努力は敬服に価するとしても、そもそもの初めから方法を誤っているものであって、満足な解答が出てこないのは当然のことではなからうか。

それにしても「殺ってやる、教会の中だってかまうものか」ではあまりにも芸のない蛮行である。そんなことをされたのではクロード・ディアスが困ることはすでに話題にしたが、しかし、この場合、それだけの覚悟はせひと

も持ってもらねばならない。そこ迄くれば、いかなる悪だくみだって、感情の墮性からも否むことはできない。機は熟したのである。王はここで初めて自分の計画を語って聞かせる。先どめのない剣で一つき——これなら過失ですむだろう。レアーティーズはたちどころに賛成するだけでなく、さらに「剣に薬を塗っておきましよう」と手先としての共犯の埒を踏越えて、完全な共謀者に変ずる。毒による殺害——しかも、その毒の強さは「どんな薬草から採った薬でも、手のほどこしようになく、ほんのかすり傷で命はない」というのだ。なるほどこれなら完全に目的が果せよう。しかし、毒を使えばもはやただの過失ではすまなくなる危険があるではないか。ハムレットが憎いのはわかるが、武芸の鑑ラモードが称えたというレアーティーズの腕前はどうしたのだろう。それに、良心の問題がある。それも考えればこそ、王は手を変え品を変え、レアーティーズを説得してきたのだ。確かに王の努力は効を奏したけれど、レアーティーズの積極さがこれ程であろうとは全くのところ飄然から駒だろう。とすると、レアーティーズの提案は王の心に満足感と共に一抹の不安を感じさせたのかも知れない。自分の腕に信頼しきぬような手を打つとしたら、王としてもレアーティーズだけにこの仕事をまかせて、手を汚さずにおくというわけにはいくまい。毒で殺人を果すとしても、ちよつと「かすれば」それで万事OKというような安易な考えでは、まかせっきりにしておいてはかえって危いかも知れない。王はやはり自分でもきめ手をこしらえておいた方が安心だろう。「やりそこなって、もくろみが曝れるようなへまをやるくらいなら、やらぬがましだ」という言葉には、王の慎重な態度がよく現れている。彼はハムレット謀殺の光景を頭に描いていくが、たちまち名案を思いつく。「渡り合ううち体はほてり、のども乾こう。その時に備えて杯を用意しておこう。一口なめれば、たとえお前の毒の刃は逃れても、そこで仕とめられよう」というのだ。レアーティーズが失敗したら自分が後をみようというのは当然だろうが、王はレアーティーズの剣を「お前の毒の刃」といいながら、自

分の計略には毒という言葉を表に出してはいない。ここにも王のそのなさがよく現れている。これでハムレット殺害計画は二重、三重とかためられたことになり、大詰の場はこのパターンに乗って行われていくはずである。

ここで王妃が登場し、王のレアーティーズ説得は中断されるという形で完了するのだが、ほぼ一〇〇行に渡る王の論法についてさらにもう一步進んで考えてみたい。というのは、王の論法がパトスを狙ったものであり、その展開の面白さについてはくどいほど詳しく説明した積りだが、反論も比較的簡単に立てられるからである。たとえば、リアリストと呼ばれるシュツキングは「この場はおそろしくくどくて、劇的緊張を幾分破りさえする」と云っており、J・D・ウィルスンもあっさりプロクラスティネーションで片付けている。この場に意義を見出している人でも、たとえばウィルスン・ナイトは「また一つ、一見余計な場」とか「王の必要なほど念入りの論議」とかいう表現を使っているし、グランヴィル・バーカーでさえ「シェイクスピアはここでレアーティーズをハムレット殺害計画にだき込むのに一〇〇行以上も費している……実際のところ、ことはもっと経済的に運べたであろう」とことわっている。筋の運びだけを問題にすれば、これはど長いスペースは確かに必要である。レアーティーズはハムレットに復讐したがっているのだから、さっさと手段を授けてしまえばことは簡単だ。例えばQ₁である。もつとも、Q₁にはシェイクスピアのオーセンシティはなく、ウア・ハムレットの残骸とシェイクスピアの『ハムレット』の断片の杜撰な混合物、あるいは、中間的存在としての価値しかなく、通例、バッド・クォートウと剽窃呼ばわりされて歯牙にも掛けられないのだが、文学としての価値を論外にしてみると、『ハムレット』というお話にこういう形をつけることも可能であったということは歴史的事実になる。Q₁の王とレアーティーズとの対話はわずか三八行で、レアーティーズは簡単に王の申し出を引受けてしまう。先どめのない